

この度は、大原富枝賞におきまして最優秀という栄えある賞を頂戴し、とても光栄に思っております。

高校時代にある小説を読んだことをきっかけに文学に親しみ、自ら創作を行うようになって以来、作品を投稿した先で多くの助言をいただけてきました。未熟な作品であったにもかかわらず、それに向き合い励ましてくれる方がいてくださったおかげで、今回このような賞をいただくことができました。心より感謝申し上げますとともに、これからも変わらぬご指導をお願い申し上げたいと思います。そして創作するにあたり大きな支えとなっている家族にも感謝の気持ちを伝えたいと思います。

今回最優秀をいただきました「小瓶」は、主人公が小瓶に纏わる記憶を回想する場面が多く登場します。いまのコロナ禍という社会の状況のなか、これまでの生活が一変しあらゆる存在と隔てられているからこそ、過去に思いを巡らせる機会が以前より増えたのではないかと思います。そんなときに自然と浮かび上がってくるのは現在の自分の姿であり、霧が薄くなっていくように、自分が欲しているもの、欲していると思いついていたものが分かっていくような気がしました。

完全に霧が消え去ったわけではありませんが、大切なものから一度遠くに身を置くことで見えてくるものがあり、たとえ何も見えずにただ薄闇のなかを歩いているように思っても、私たちがそれぞれの視点で見た各々の日常はこれからも続いていきます。すべては目の前の景色をどう捉えるかで世界はまったく違ったものになりますが、文学はその人の目に映る世界に奥行きと深さを与え、鳥のように俯瞰的に多くを把握しながらも、小さなものに心を寄せることを教えてくれます。

会話のように言葉を発した先に目に見える他者がいるわけではありませんが、ページを捲るとそこには数えきれないほどの見えない他者が存在し、見たことのない景色が静かに広がっています。その世界にひとりの読者として、そして未熟ではあるけれど、ひとりの創作者として、これからも向き合っていくことができれば良いと思っています。